

蝗の祭り — その中国的展開 —

今 井 秀 周

中国が古来悩まされてきた災害の一つに蝗害がある。これはバツタ類の大発生によって農作物が食い荒されるところとなる。大抵旱魃の後に発生するため、甚大な害を被むることとなる。蝗を絶滅するのは現在の科学水準を以てしても極めて困難だといわれており、過去いくらかその技術が高められてきたとはいえ、やはり限界があったのである。人の智力の及ぶ所ではない。そのやる方ない心は祭る祈るという行為に走らせる。いつの資料にもそれが見える。では一体何を祭り何に祈ったのか。小論は、その具体例を諸書より抽出したものである。

一口に祭りといっても様々な形が存在する。それらを明確な線で分類することは、祭りというものの自体複雑な内容を有することから難しいと思われるが、便宜上、敢て五つの形に分け配列してみた。はじめ二つは呪詛であり、あと三つは祭祠の形である。

一、直接に蝗を呪う。

これには、唐の太宗が蝗を呪い、生きたまま呑んだという有名な話が残されている。

貞観二年六月、京畿旱蝗、食稼。太宗在苑中、掇蝗呪之曰「人以穀爲命、而汝害之。是吾民也。百姓有過、在予一人。汝若通靈、但當食我、無害吾民。」將吞之。侍臣恐上致疾、遽救止之。

上曰「所冀移災朕躬、何疾之避。」遂吞之。是歲蝗不爲患。（『旧唐書』37五行志）

二、蝗を発生させたものを呪う。

（太初元年）是歲、西伐大宛。蝗大起。丁夫人・雒陽虞初等、以方祠詛匈奴・大宛焉。（『史記』28封禪書）

漢代、蝗の発生には戦争が大きなきっかけになると考えられたが（『漢書』五行志）、この記事は、その敵国であった匈奴や大宛を呪うことによって蝗を止めようとしたことを伝えている。『史記』以前の書にも蝗の発生が多く記されているが、火で、焼き殺した（『詩経』小雅）などとはあるものの、だから何を祭ったという記事は搜し出せなかった。それどころか、蝗のすさまじい繁殖力が讃えられる（『詩経』周南）ということすらあったのである。恐らくそうした古い時代には右のような呪術的方法が行われていたであろう。

三、直接蝗に害を為さぬよう願う。

祭祠として最初にあげるこの形は、いかにも特殊なことのようだが、実はこれも古くから行われていたようである。従って古くは多分に呪術的性格を帯びていたであろうが、後世、歳時の形式的な祭りとして長く行われたので、この類に入れることにした。

天子大蜡八。伊耆氏始爲蜡。蜡也者索也。歳十二月、合聚万物而索饗之也。……曰「土反其宅。水暘其壑。昆虫毋作。草木暘其沢。」……（『礼記』郊特牲）

蜡に祭られる八つの神の一つ、昆虫というのが、外ならぬ蝗などの稼りを害う虫をさす。「昆虫よおこるなかれ」と祝辞にあるよ

うに、どうか発生してくれるなと蝗に願うわけである。或は昆虫の心を鎮めるという考え方もできるであろう。また、蜻では害を為す虫を祭るのではなく、害虫を退治してくれる諸々のものを祭るのであるとの解釈もある（宋陳祥道『礼書』）。蜻は年末に行われる農耕の祭りの一つであるが、必ずしもその時に限ったわけではなく、害虫発生の際にも設けられたと思われる。次の記事もそれを予測せしめる。

至正八年七月、虫螟生。民患之。秉直禱於八蜡祠。虫皆自死。

（『元史』110良吏、劉秉直伝）

四、蝗を発生させたものを祭る。

これが最も普通な形であろう。所謂天を意識したものである。漢代、儒学者によって災異説が考え出されたが、このため、もし災害が生じた場合、為政者達は身を正し政を正して災を鎮めるといふ形がとられるようになった。この他に、天に祈るといふ積極的な形もある。儒教は盛衰の差こそあれずっと続くものであるから、以後いつもこれがくり返されたのである。

五、蝗を除いてくれるものを祭る。

たとえば虫を食べる鳥や、冷気で虫を殺す氣象神や、田畑の神とか、祖先神とか、様々なものがあげられる。中には特に長期間維持された祭りもあった。次はその例である。

中元元年、山陽・楚・沛多蝗。其飛至九江界者、輒東西散去。

由是名称遠近。浚遼県有唐・后二山、民共祠之。……衆巫遂取

百姓男女一、以為公・嫗。……歲歲改易、既而不敢嫁娶。前後

守令、莫敢禁。均乃下書曰「自今以後、為山聚者、皆娶巫家、

勿擾良民。」於是遂絶。（『後漢書』伝31宋均）

しかし、蝗害は毎年起きるわけではなく、被災地も不定である。まして蝗の頻発地域をはずれると何百年に一度という地もある。如何に一度ご利益があったとはいえ、必ずしも長期間祭る必要はない。こうした長く続いた祭りは極めて少なかったであろう。この資料に見える場合も、やがて弊害ばかりが目立つようになっていくのである。

こうした様々な形をとる祭りは、実際には、一つずつ行われるとは限らない。時には幾つかが同時に、時には次々と試みられながら祭られていったのである。次に二つの例を示そう。一つめは、諸神を祭ったが全く効果がない。蝗を除くにはやはり身を正して天に訴えるしかないと思つた唐の徳宗の詔である。

貞元元年秋七月庚申、関中蝗。……甲子詔「……徧祈百神、曾

不獲応。方悟禱祠非救災之術、言詞非謝譴之誠。憂心如焚、深自刻責。……罪實在予、万姓何辜。……」（『旧唐書』12徳宗紀）

次は前とは逆で、いくら人力を尽したところでたかが知れているから、積極的に諸神に祈って応報を得ようという考え方である。

在詩有云、去其螟蟊、及其蟊賊、害我田穡、此人事也。乃以属諸田祖之神。何哉。蓋禦菑弭患、在神為之則易、而在人為之則難。日者、本道郡邑、以姦生聞。天子有詔、俾長吏禱於山川百神。是亦周先王意也。惟諸王廟食、歲久、陰威赫然、雲奔風馳、山岳可撼。況区区虫蝗之孽乎。驅之攘之、以畀炎火。是直

噫欠聞耳。虔共致祈、立俟嘉応。（宋真徳秀「諸廟禳蝗祝文」）

以上種々の蝗の祭りをみてきたわけであるが、人の手によつ

て蝗を退治することの方が肝心なのは、もとより言うまでもない。ところが、これらの祭りが考え出され行われるようになると、反ってその大切な作業が忽かにされていくことに注意しなくてはならない。殊に甚しいのは儒教の影響であって、蝗の発生原因を為政者に求めた結果、為政者さえ正しくありさえすれば、直接蝗に手を下す必要などないという極めて消極的な論まで出てくる始末であった。ともかくこうした弊害は唐を界として少なくなり、代ってより実質的な蝗退治が推進されるようになる。しかし、それでもなお蝗の祭りが続行されていたことには、いささかの遺瀕無さを感じるものである。

加賀掾と談義本

——天理本『熊野権現開帳』の位置——

沙 加戸 弘

古浄瑠璃『熊野権現開帳』は、現在二本が知られている。一本は天理図書館の蔵本であり、もう一本は東大霞亭文庫所蔵にかかり、『熊野権現開帳付平太郎きすい物語』の内題を持つ。

この天理本と東大本は、従来同一の正本であると考えられてきた。共に著名な三十三間堂棟由来を中心とする平太郎の仇討・出家・熊野参詣の物語で、同じ内容、酷似した挿絵、よく似た文章と、同一正本と考えられるだけの条件は揃っている。が、詳細に比較検討すると、別の正本であることが判明する。

では、この天理本『熊野権現開帳』は、どういう正本であるかを考えるに、原題愈もなく、はじめ三丁、おわり二丁程度が欠けているため、手がかりは本文だけということになる。そこで、四段目にある道行を手がかりにすると、この道行は、延宝・天和・貞享期に活躍した浄瑠璃太夫、宇治加賀掾の段物集『大竹集』等に収められている「平太郎道行」と一致する。したがって天理本『熊野権現開帳』は、加賀掾正本であると判断してよいと思われる。

この加賀掾の『熊野権現開帳』と東大本『熊野権現開帳』との間に深い関係が存在することは述べたとおりであるが、東大本の太夫名、刊年等は残念ながら今のところ明らかにすることができない。

しかしながら、加賀掾の『熊野権現開帳』が確認できたことにより、加賀掾には興味ある三種の真宗関係浄瑠璃が揃うことになる。一つは、近年大英博物館本が古典文庫より刊行された『他力本願記』、もう一つは今の『熊野権現開帳』、今一つは、同朋大学の織田顕信氏が、『同朋仏教』第六・七合併号に翻刻紹介された天理図書館所蔵の『源海上人』である。

では、なぜこの三種の浄瑠璃が問題となるかという点について、次に述べてみたい。これらは、いずれも延宝初年から天和初年にかけて刊行された浄瑠璃である。まず、『他力本願記』は、非常に巧妙にカムフラージュされているが、親鸞の伝記であることはまちがいのないところである。このカムフラージュは、寛文十二年十一月に、浄瑠璃出版界に対し、東本願寺からきびしい指弾